



TITLE:

岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1959, 28(3): 1044-1046

ISSUE DATE:

1959-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206792>

RIGHT:

に興味深いと思われるので、若干の考察を加えて報告した。

(7) 膝関節前交叉靱帯形成術

玉造整形外科病院 清家 隆介

1) 22才男子の内側半月板損傷を合併した陳旧性前交叉靱帯断裂に対して半月板剔出及び Hey Groves法による前交叉靱帯形成術を施行し良好なる結果を得た。

2) 本症には大腿四頭筋萎縮、半月板損傷、外傷性関節炎等、陳旧化した膝関節機能障害を合併したものが多く、且つ膝の支持性は関節構築に関与する全ての器官の協和によるものであるとの見地から術後は早期より膝自動運動を開始し筋力の保持、関節運動の正常化に努めるべきであると考えた。

3) 形成せる筋膜片の上下端の固定には主力を上端は腱筋膜下端は反転して内側副靱帯に求め、術後関節

運動時の新交叉靱帯過緊張の懼れに対し多少の弾力性をもたせる様に工夫した。

追加

整形 鶴海 寛治

前交叉靱帯形成術予後可動性良好となると共にヒキ出し症状の再現する症例がある。もう少し長い経過を見てもらいたい。

答

現在術後三ヵ月で後療法を継続中である。伸展178°屈曲34°と良好である。正座も少時なら可能である。関節運動良好であるにかゝらず抽出し現象は再現していない、尚経過をみたい。

(8) 人工骨節置換術に関する知見

玉造整形外科病院

大塚哲也・山田 栄・林 瑞庭
笹井義男・水清隆介・牧野文雄
宮武正弘・古庵雄三・田村哲男

岐 阜 外 科 集 談 会

時 昭和33年11月26日

所 岐阜市朝日新聞岐阜支局

(1) Pilonidal Disease に就いて

岐阜医大第一外科 村瀬 晃朔

本病は臀部正中線殊に仙尾関節部に好発するもので慢性炎症性、異物性の肉芽性反応を示し Cyst 又は Sinus として認められ、内腔に大多数に於いて毛髪が認められる。

本病は思春期から25才迄の間に多く認められる。その発生源は未だ決定的でなく先天性説、後天性説、先天後天説等色々述べられている。

本病は欧米人に多く見られ我国に於ては甚だ稀なる疾病である Pilonidal Sinus の一例を経験したので発表した。

(2) 硬膜下血腫

岐阜医大第二外科 上田 茂夫

過去2年間に教室に於て経験した慢性硬膜下血腫5例につき報告した。同期間に於ける頭部外傷入院患者の約8%にあたり25才から56才で全例男子であつた。5例中1例は外傷の経験なく左橋角症候群を呈し手術により偶然左天幕上硬膜下血腫を発見し血腫並びにその被膜切除を行つたもので、他の1例は12年間痙攣発作を主訴として経過し硬膜下に慢性骨化した血腫を認

め除去したものである。手術としては穿頭術により血腫内容除去のみを行つたもの2例、被膜切除を併用したもの3例である。

(3) 縦隔腫瘍を疑つた肋膜炎症例

岐阜医大第一外科 渡辺 克

最近経験せる34才男子の術前の諸臨床症状及びレントゲン検査により恰も縦隔腫瘍を疑わせる所見を認めたが、開胸手術によつて結核性肋膜炎の誤診せるものであつた症例に就て報告した。

(4) 教室における食道癌手術の経験

岐阜医大第二外科 斎藤 晃

最近食道癌の早期発見の努力によつて、根治的手術を施行する症例が増加しつつある。我々の教室でも過去一年間に5例の手術を経験したので、これらの症例をまとめてみた。

性、年齢、初発症状等は概ね過去の統計的観察と一致していた。手術は食道及び胃噴門部を切除した後、胸腔内食道胃吻合を行つたもので、術後は一例の肺浮腫によると思われる死亡以外は比較的順調な経過を辿っている。

術後愁訴としての一過性下痢或は便秘、食後胸骨後

方の膨満感及び索引痛、心悸亢進等はいずれも次第に軽快するものである。逆行性食道炎を思わしめる愁訴なく、術後レ線透視によつても、胸腔内に引上げられた胃は活発な運動機能を保持している事が認められた。

(5) 小児を主とした先天性鼠径ヘルニアの
新手術法（副腹直筋開腹ヘルニア門閉鎖法）

羽島市国保直営病院

渡部三郎・浅井紀雄・伴敏英

渡部の考案した副腹直筋切開開腹してヘルニア門を腹腔側より充分上部で切断縫合する方法で手術を行い、6ヵ月以上の経過を観察した。ヘルニア門の閉鎖のみを行つた22例中再発1例、縫合材料の不良による不成功例1例が出た。ヘルニア門閉鎖の外に腹壁強化を追加したもの6例で、これからは不成功例は出ていない。

演者等は先天性鼠径ヘルニアに於ける鼠径管が自然癒をしようとする復元性と、これに抵抗する抗復元性因子及び二次的に起る非可逆性変化の相互関係を論じ、本手術方法の得失について検討した。

1) 先天性鼠径ヘルニアなら殆んど全例が同一方法で、比較的容易に手術し得る。

2) 術後再発の最大原因とされる腹膜鞘状突起の取残しをつくらない。

3) 精管、血管、神経等を損傷しないので術後の浮腫、血腫等が起らず後障害の恐れがない。

4) 嵌頓したもの、非還納性のものには困難を予想して適応外としている。

(6) 最近経験せる骨肉腫に就て

岐阜市民病院外科 島田 脩

骨肉腫は骨の悪性腫瘍中の大部分を占める疾患であるが我々は最近1ヵ年にその3例を経験した。

第1例：15才の♂

約1ヵ月前より左膝関節部の腫脹疼痛生じ、左大腿骨切断術施行するも6ヵ月後死亡。

第2例 24才の♂

約5ヵ月前より右下肢の上部の腫脹生じ、右脛骨と共に腫瘍剔出。8ヵ月後健在。組織学的に多形細胞肉腫。

第3例：13才の♂

約1ヵ月前転倒。その後左股関節の腫脹。左骨盤骨肉腫。ナイトロミン及びコバルト、X線深部治療施行。

レントゲン学的に第1、第2例は放線状骨肉腫。第3例は彌漫粗斑点状骨肉腫（Schinz）であつた。

(7) 尿道下裂に対する Denis Brown 氏手術について

岐阜医大泌尿器科 篠田 孝

尿道下裂に陰茎腹部皮膚を利用する Denis Brown 氏の方法が適応されるようになってから、手術成績は非常によくなつた。この方法をスライドにて紹介し、最近当科を訪れた症例4才、12才、15才、9才、（内後3例は、Denis Brown 氏の方法で手術を施行した）4例を併せて報告した。

(8) 第2 Köhler 氏病の2例

岐阜医大整形外科 松永 隆信

15才、及び16才の女性の夫々左第2、右第2中足骨に見られた第2 Köhler 氏病の症例を報告した。このうち第2例は中足趾関節腔にハイドロコーチゾン0.3cc注入を4回行つて自覚症状は緩解した。

本邦に於ける本症の報告例は、上記2例を含めて36例で、このうち女が31例、又10才代に最も多く22例を占めており（最低9才、最高28才）主に第2中足骨がおかされているが、第3中足骨のおかされたものが2例ある。尚レ線学的に治癒を確認しているものは2例にすぎない。

(9) 廻盲部レ線検査と手術所見における2
・3の臨床経験に就いて

村上外科病院 村上 治朗

1. 経肛バリウム注入で証明し得ず、経口バリウム法で発見した慢性クローン氏病の1例を述べ、検査として両法併せ行うことの必要を説く。因みに患者は廻盲違和を主訴とし、某大学病院にて3回の開腹をうけながら診断が明かにせられていなかったものである。

2. 慢性廻盲部違和を主訴とする101例中63例に廻盲弁逆行阻止性、38例に逆行可能を認め、昭和16年藤浪が健常者120例中前者20%、後者80%の報告を行つた症例の場合と比較考えて、廻盲弁逆行阻止性の病因性を説く。

3. 廻盲弁逆行阻止性のある移動性盲腸症32例に廻盲弁成形術を行い、逆行可能とし、廻盲違和の消失を達成、その新手術術式を述べ。術式は廻盲ひだ線上で幽門狭窄に対する Finney 氏手術に似た廻盲吻合を行うのであるが、虫垂切除と併せ行い、その効果は極めて的確である。

(10) 2年以上を経過せる肺葉切除患者284例
の遠隔成績について

岐阜市日野荘 小林 君美

(11) 胃切除後縫合絹糸に起因せる通過障害
の1例

大垣市西濃病院 坂口 昭五

投稿規定 (昭.33.10.30改正)

○本誌は毎年1月, 3月, 5月, 7月, 9月及び11月
の1日に発行する(年間6冊). 状況により臨時増
刊を発行する.

○本誌予約購読者の原稿を掲載する.

○予約購読料は年額1,000円(送料を含む)とし, 分売
は1冊200円とする.

○原稿の長さはおよそ下記の限度とし, 和文原著には
欧文表題, 欧文抄録, 欧文原著には和文表題及び和
文抄録を添附されたい.

原著論文, 綜説, 臨床, 400字詰40枚以内(図表共)

症例報告, 研究速報, 400字詰15枚以内(図表共)

○原稿の当編輯室へ到達した日附を受付日とする.

○原稿の用語中, 固有名詞はすべて固有の文字を, 又
数字はすべて算用数字を使用し, 日本語化した外国
語は片かなでかく事. この際は「」不要.

○数量の単位は下記の例による

例, m, cm, mm, cc, kg, g, mg, °C, μ ,
%, pH, 等ピリオド不要

○原稿は横書とし新かなづかいを用いる事.

○欧文及び欧文抄録はタイプライターで記入され度
い.

○挿画, 曲線等は必ず白紙又は青線方眼紙に墨で清書
し挿入位置を原稿に記入する事.

○図, 表, 写真等はすべて別紙に記入, 若しくは添附

し本文中には挿入箇所のみ指定する事.

○原稿は完全なものとして御送附願いたい. 校正の際
における加筆補正は認めない.

○引用文献は篇末に集め, 次の例による.

(氏名) (表題)
Beatson, G. T.: On the Treatment of Inoperable

Case of Carcinoma of the Mamma. Lancet, 2,

(頁)(年代)
104, 1896.

三宅 儀: 副腎皮質ホルモンの測定と臨床. 最新医
学, 6, 766, 昭26.

○掲載料は実費として1頁1200円とし, 図表写真版等
の費用は著者の実費負担とする. 但し症例報告に於
ては3頁までは無料とし, 此れを越すものに対して
は実費を徴収する. アート紙の使用, コロタイプ天
然色図版の掲載等に関しても著者に於て実費を負担
するものとする.

○症例に於て特に早く掲載を希望し掲載号を指定され
る方の掲載料は全額実費負担とする

○執筆者に於て別刷希望の方は, 寄稿と同時に希望数
を附言せられたい別刷は実費を申し受ける.

○原稿は書留郵便で下記に送られたい.

京都市左京区聖護院川原町53

京都大学医学部附属病院外科学教室内

日本外科宝函編輯室宛

電 ⑦ 4221 } 構内 427の乙
4111 }

昭和34年3月21日印刷

昭和34年4月1日発行

編輯兼発行者

京都市左京区聖護院川原町

青 柳 安 誠

印刷者

京都市下京区油小路松原上ル

松 崎 秀 雄

印刷所

京都市下京区油小路松原上ル

松崎印刷株式会社

京都大学医学部外科学教室

発行所

日本外科宝函編輯室

代表者 青 柳 安 誠

(振替口座京都3691番)